20101010

〈ケア〉ノート

徳永進『こんなときどうする？――臨床のなかの問い』岩波書店2010より抜粋

臨床は独特の世界、独特のフィールド。身体に生じていることも独特で、火山に似てるし、自然の一部に位置しているから、人間の意思や希望を超えて展開していく。心に生じていくことも身体とは別なのだけど、独特で、空の雲のようで、自由に変化し、捕まえようとするとするりと逃げていくし、諦めているといつの間にか元の空にポッカリ浮かんでいたりする。

臨床で働いていると、いろんなことに直面し、巻き込まれ、過誤を生じ、友情が生まれ、慣れ、ガツンと食らい、忘れられない温かい体験をしたりする。

「それで、まだ臨床で働く気なの？」と自分自身に問う。「うん、体がもてば」と答える。「どうして」と返される。「日々刻々、年々刻々、臨床は変わっていって、大変だけど、自然現象みたいで、もちろん自然現象なんだけど、だから一日も同じでないし、まだ飽きが来ないから。あすの臨床に参加していたいし、あすの臨床を見てみたいから」。

――「はじめに」より――

臨床は海だあ、と気が付いた。教科書には書き込まれていないことで満ちている、と思った。海は、穏やかな春の日の凪の海もあり、冬の日本海の荒れる海もある。青い澄んだ海もあり、油で汚れる海もある。海藻や魚たちが群れるいのちの海もあり、戦艦の沈む死の海もある。臨床は海で、海のように何が起こるか分からない。海のように相反することが共存する。これが正しい海だ、などと言えないように、正しい臨床なんてない。一日一日、一刻一刻、臨床も海のように変わっていく、と思った。

患者さん一人ひとりはそれぞれに違い、家族一人ひとりもそれぞれに違い、がんそのものもそれぞれに違い、死一つ一つもそれぞれに違う。同じやり方が全てに通じるということにはならない。だから大変で至難、とも言えるし、だからこそ面白い、ともいえるのだろう。

臨床は「こんなときどうする？」の連続の場、終わるあてどのない場、として在り続けていくのだろう。

臨床はいつも、「どうして？」「どうする？」「どうなる？」などの問いの場だ。同時に、早急の答えを求められる場だ。正しい答えが一つ、ということはない。その時々に、その場にいる者たちで考え合うしかない。考え合っているうちに、どこからともなく道が生まれる。海にできる潮路のように。それを体験することができた時は喜びだ。潮路が見えない時、生まれない時、私たちの試練は続く。

　絶え間ない問いが続く臨床で、大切なことは何だろうと考えてみる。「正しい答えを出すこと」の前に、次のようなことが大切なのかもしれない。「親切に」「見捨てることなく」「今、目の前に起こっていることはとても大切なこと、と自分に言い聞かせ」「楽しく、興味を持ち」「工夫し、反省し」「あらゆることに敬意を持ち」「誠意を持ち」「関心と関与を持ち続ける」などだろうか。

――「おわりに」より――